

日本の絵本／歴史的考察

占領期の翻訳絵本・『ねむたいライオンの子』の場合

石川 晴子

(大阪樟蔭女子大学)

研究目的

1945年の敗戦から1952年の講和条約による独立までの期間の翻訳出版には、かなりの制約があった。1948年5月から51年までは、占領側の連合軍総司令部（GHQ/SCAP）から提供された書籍を入札して翻訳許可を得て出版が行なわれていた。入札に供された著作827点のうちに児童書がどのくらいあったか、それら具体的に何であったか、実際に何が翻訳出版されたかなど実態についての調査研究は決して多いとはいえず、明らかになっていることも限られている。入札され翻訳出版された絵本の一冊について現在判明していることを記録して、子どもの本の歴史の空白部分を埋める一助としたい。

『ねむたいライオンの子』

1949年7月に第8回の入札が行なわれた。このときに提供された絵本の一冊が『ねむたいライオンの子』である。出版されたのは翌年の1950年4月である。翻訳された絵本と原書の奥付は以下のようなものである。

ねむたいライオンの子

写真・イーラ（モノクローム、表紙のみカラー）

文・マーガレット・ワイズ・ブラウン

訳者・小峰広恵

発行・小峰書店

印刷所・光村原色版印刷所

総司令部民間情報教育局第八回翻訳許可書

当社に於いて1949年7月27日より4ヵ年翻訳権を独占す

昭和25年4月5日 印刷

昭和25年4月15日 発行

定価・120円 31頁 大きさ・28.5×23.5cm

The Sleepy Little Lion

Photographs by Ylla (monochrome, cover:color)

Words by Margaret Wise Brown

Harper & Brothers Publishers・New York and London

Printed in the United States of America

Copyright, 1947, by Ylla (31Ps., 28.8×24cm)

訳者の小峰広恵（1905～1985）は、1946（昭和21）年に小峰社を創業し、以後児童書に力を入れた出版活動を行なっている。津田英学塾出身であることから自ら翻訳したものと思われる。

写真を撮ったイーラ（Ylla, or Camilla Koffler, ?～1955）は、ハンガリーで育ったが、彫刻を志した後ヨーロッパとアメリカで写真家として活躍した。とくに動物写真では並ぶものがないという高い評価を得ていた。インドで写真撮影中の事故で若くして亡くなっている。1990年には、イーラの代表作とされる『二ひきのこぐま』（松岡享子訳 こぐま社）が翻訳されている。

文を担当したマーガレット・ワイズ・ブラウン（Margaret Wise Brown, 1910～1952）は、30年代40年に活躍している。主として絵本のテキストを書き、著作は100冊以上にのぼる。日本では、『おやすみなさのほん』（シャーロー絵 石井桃子訳 福音館書店 1962）や『おやすみなさいおつきさま』（C・ハード絵 瀬田貞二訳 評論社 1979）など多くが翻訳されており、人気も高い。

写真絵本といえ、多くの人がイーラの動物の写真絵本を思い浮かべるといふほど、イーラの撮影した動物たちはカメラを通して見ていることを忘れるような自然の姿を見せているように思われる。M・W・ブラウンがイーラの写真にテキストを書いたのは、1944年の *They All Saw It* が最初である。その後、11年にわたって二人は写真絵本を協同して作っている。『ねむたいライオンの子』は、ジャック・プレヴェール（Jacques Prévert）がテキストをつけたフランス語版 *Le Petit Lion* がアメリカと同じ1947年に出ている。この一事をとっても、イーラの大西洋の両岸での人気を知ることができる。

『ねむたいライオンの子』は、最初の写真による物語絵本である。野性の猛獣の赤ちゃんが動物園の檻から出て、犬や兎に出会ったり、人間の子どもの赤ちゃんとしてかわいがってもらおうという無邪気な様子を描いたものである。

日本における『ねむたいライオンの子』

グリム童話やアンデルセンの話をはじめとして西欧の話だけでなくインドや中国の話などが、明治初期から日本に翻訳紹介されている。しかし、外国の絵本が絵も含めて原書に近い形で日本語に翻訳された例は意外に少ない。アメリカの絵本がある程度数、まとめて翻訳されたのは、敗戦後の占領期がはじめてであった。入札制度によって占領国のアメリカから被占領国の日本に提供された絵本が、どのような基準によって選択されていたか等、これから解明されなければならないが、その一冊であった『ねむたいライオンの子』は絵本としてどのようなものであったかをみてみたい。

『ねむたいライオンの子』は、先述のように写真による物語絵本の第一作である。日本に写真絵本が紹介されるのは、これが最初であったと思われる。日本では、19世紀になってカメラや写真技術が発達するとともに比較的早くから導入され、雑誌などに写真が掲載されている例もいくつか見られる。しかし、写真だけで、しかも子どものための絵本が作られた例は1945年までにはなかったのではなかろうか。アメリカでも、子どものための写真絵本は、おそらく1930年刊行の *The First Picture Book* (prepared by Mary Steichen Martin, photos by Edward Steichen. Harcourt) であろう。その後、カメラの接写や望遠などの機能を生かして撮影された写真を、トリミングによって斬新な画面に構成した絵本が作られた。エンパイアー／ステイト・ビルで働く人々の姿や建築現場の様子を写真で描いた *Skyscraper* (text by Elsa H. Naumburg, Clara Lambert and Luccy Sprague Mitchell. John Day, 1933) など対象物をありのままに写し出すと考えられていたカメラの特性を生かした絵本が作られていた。

1930年代の日本は第一次大戦後の好景気に支えられて多くの近代文明や文化の成果を西欧から導入した後世界恐慌の流れのなかで外国に対する姿勢を大きく転換させた。したがって、写真絵本が主としてアメリカで物語を語るためのイラストレーションの技法として用いられるようになった過程を、日本に取り入れる機会はなかったといつてよかろう。

『ねむたいライオンの子』は、日本に紹介された最初の写真絵本として、絵本の歴史を考える上で意味があったと思われるが、実際には文献に取り上げられることはきわめて少ない。1950年頃の日本は翻訳絵本を受け入れる状況ではなかったのであろうか。写真絵本が知識絵本物語絵本のいずれでも作られるのには、その後かなりの期間は経てからであることを考えると、

絵本のイラストレーションの技法としての写真を取り入れるきっかけになるほどの影響もなかったのであろうか。今後の検証を待ちたい。

まとめ

敗戦後の日本にアメリカをはじめとして西欧の絵本が日本語に翻訳して紹介されたのは、正式には『ふしぎな500のぼうし』（シュース著 大森武男訳 トッパン出版 1949）と、マンロー・リーフ作・絵の『ばらしい世界へ』（秋庭俊彦訳 創芸社 1949、原書未詳）であったと思われる。入札に供されたアメリカの絵本は十数冊あったと考えられるが、それらの絵本は、テーマ、スタイル、フォーマット、対象となる子どもなど、実に変化に富んでいる。

『ねむたいライオンの子』は刊行が1947年である。日本で入札に提供されたのは1949年であるから、現在の翻訳状況から考えても、かなり速い紹介である。当時評判の高かった絵本であり、絵本の技法としても新しい絵本を日本に紹介しようとする意図をそこに見ても間違いではないであろう。

これらの絵本は、GHQの下部組織であったCIA（民間情報教育局）の管轄下で入札に供されたり、翻訳を奨励されたものであった。当時の状況では、アメリカの対日メディア政策の一旦を担ったものであったに違いないが、今日から見て興味深い、今も日本の子どもに読まれている絵本が提供されていることは、かえって驚きに値する。誰が、どのような考えに基づいて選択したのであろうか。また、日本では、それらの絵本がどのように受け入れられたのか、あるいは受け入れられなかったのか、それはまた、どうしてであったか、これからの調査研究の課題は少なくない。